国語

（問題）

2015年度

〈H27091121〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	◎悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	◎悪い	○悪い

5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ありえないことであるが、仮に人間がまったく一人で存在するなら、定義によって社会はないのだから暴力もない。単独者ではなく、人間が社会的存在であるからこそ、つまり簡単に言えば複数の他人と一緒に生活するから、暴力がある。暴力とは何よりもまず他人への暴力であるし、それ以外はない。

なぜ人間は他人と一緒にいると、[a] 他人に対面すると暴力的になるのであろうか。人々は、他人に対面するとき、自分が他人よりも価値評価の面で上位にある、優越していると欲望したり期待したりする。自分の優位性を自分で確信するだけでなく、他人からも自分の価値（自己尊厳）を確認してもらう、あるいは同じことだが他人に強制的に確認させようとする。人間は自分の内面で自分は何ものかであると確信することでは満足しない。人間は自分のこの確信を他人によって確証してもらいたい、自分の価値を是認してもらいたいと欲望し、その欲望を満足するまでは、他人に対して自分の優越価値をつきつけ続ける。人間の社会性は、他人から自分の存在評価を獲得するという行為にある。他人からの是認の欲望は激烈であり、それがよくも悪くも [Ⅰ]。

別の形で言えば、欲望とその満足の動きが重要である。自分の内面だけで「自分は偉いのだ」と感じるだけでは、人間はけっして満足しない。満足は自分の確信だけでは得られない、[b] 他人の介在、他人が「そうだお前は偉い」と言ってくれないと人間は満足しない。

A

満足はけっして孤独な個人の行為ではなく、はじめから複数の他人との関係であり、社会的事実である。欲望は、他人に向かって他人による評価を欲望することであり、満足もまた、他人からの確認に依存するのだから、同じく社会的である。人間は誰であれ、自分はだめだとはけっして思っていないが、その主観的確信を客観的にしたいと激しく期待している。この自己確信を客観化すること、[Ⅱ] にすることは、具体的にはどう表現されるかと言えば、公然と、誰にもわかるように、言葉と身振りをもって、他人が自分を価値的に是認してくれるように他人に圧力をかけて、力ずくでもその評価を獲得するという形をとって現れる。

自分で自分を評価すること（自己尊敬）が出発点であるが、さらに進んで他人からこの自己評価を承認してもらう、あるいは無理にでも承認させること、この評価の二重性こそが、人間を社会関係のなかに引きずりこむ。他者を我のほうから引き込むのである。人間は事実においてはつねにすでに社会のなかに生きているのであるが、個人の側からその欲望と満足の動きを描くなら、自己確信から他者による承認へと動くのである。それが欲望と満足の関係なのである。

B

人間が「世間（社会）のなかで生きる」という事態において、[c] 社会的経験において、もっとも原初的な精神の体制は、この二重の確認（自己によるのと他人によるのとの二重性）である。重要なこと、肝心なことは、満足するという事態である。その満足は、肉体の欲望の満足とは本質的に異なる。

肉体の欲望の満足は、空腹を満たすと終熄（しゅうそく）するように、欠如のジュウ填[1]である。空白がなくなれば欲望の動きはそのかぎりで停止する。しかし社会的欲望は、欠如を知らない。肉体の満足があっても、社会的欲望は満足しない。物質的に満足していても、人間は「もっと多く」を欲望する。社会的欲望は、自分の外部にある他人の精神的行為を、つまりは我を評価してくれる他人の精神を欲望するのであるから、他人の精神が我のほうに方向を向け直すまでは欲望の満足はありえない。他の人間の存在は、こうして、我の存在または人格の精神的満足にとって不可欠の条件になる。

C

ひとつの比較をしてみよう。例えば人間は、動物の視線を感じても、それに反応しない。人間は動物の視線を恐怖するか、友好的な感じをもつかするであろうが、動物の視線を前にして恥じ入ることはないし、ましてや動物から自分の価値を承認してもらう欲望をもつことはない。もしそうする人がいるなら、その人は常識的な意味では常軌を逸している、あるいは狂っているだろう。ところが人間は、同じ人間である他人の視線には極度に敏感に反応する。人間は、他人の視線のなかに評価の視線を感じ取り、同時に他人に向かって自分を高しとする欲望を激烈に感じるし、他人を自分よりも劣るのだと自分だけに言いくるめたいと感じるのである。しかも、客観的には他人が自分と同等であるときには、ますますそうした感情をもつ。この優越意識は、人間が他の人間に対してのみ感じる欲望の現れである。

D

当事者たちは、相手以上のものになろうとする、つまり相手以上の価値があると見せかける努力をするだろう。自分の価値を額面よりも高く相手に見せかける努力は、普通は物を媒介にして行われる。例えば、地位を表示する物体を獲得することで、自分の社会的地位を観念的に上昇させようとする。これは消費社会の人間の行動のなかに、比較的無邪気な形で見られる。これが集団の間の現象として出現すると、集団の価値評価競争は、[Ⅲ]などの形式で、暴力的形態をとるようになる。戦争は種々の原因から生まれるが、そのなかでも主要な要因は、集団的存在の優越意識を他の集団から獲得する精神的動機にある。いずれにしても、結局のところ、他者に優越しようとする欲望は、[Ⅳ]のなかでの優越意識であり、それは見せかけの意識であり、つまりはキョ栄心である。

（今村仁司『抗争する人間』より）

問一 傍線部1～2にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語をそれぞれ次の**ア**～**オ**から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

1 **ア** 拡ジュウ　**イ** ジュウ篤　**ウ** ジュウ順　**エ** 懐ジュウ　**オ** ジュウ横

2 **ア** 暴キョ　**イ** キョ飾　**ウ** 特キョ　**エ** キョ来　**オ** 隠キョ

問二 空欄 [a] ～ [c] に入るもっとも適切な語句の組み合わせを次の**ア**～**カ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア a あるいは　b つまり　c したがって
イ a したがって　b あるいは　c つまり
ウ a つまり　b あるいは　c したがって
エ a あるいは　b したがって　c つまり
オ a つまり　b したがって　c あるいは
カ a したがって　b つまり　c あるいは

問三 空欄 [Ⅰ] に入るもっとも適切なものを次の**ア**～**オ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア 人間世界の存在原理になっている
イ 人間社会の原動力になっている
ウ 暴力を是認する根拠になっている
エ 他人と共存する必然性をうんでいる
オ 他人との関係性を獲得する条件になっている

問四 空欄 [Ⅱ] に入るもっとも適切な語句を次の**ア**～**オ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア 重層決定的　**イ** 価値中立的　**ウ** 公共空間的　**エ** 事後承認的　**オ** 共同主観的

問五 空欄 [Ⅲ] に入るもっとも適切な語句を次の**ア**～**オ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア ナショナリズム　**イ** ラディカリズム　**ウ** フェミニズム　**エ** コミュニズム　**オ** エコロジズム

問六 空欄 [Ⅳ] に入るもっとも適切な語句を次の**ア**～**オ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア 社会　**イ** 集団　**ウ** 感情　**エ** 自我　**オ** 観念

問七　傍線部甲「動物から自分の価値を承認してもらう欲望をもつことはない」の理由として、もっとも適切なものを次の**ア**～**カ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア　動物は人間より劣っているから。
イ　動物は人間の心を理解できないから。
ウ　人間は動物に対して対抗心を抱かないから。
エ　人間は動物とコミュニケーションできないから。
オ　動物と人間の関係が比較的安定したものであるから。
カ　動物と人間の価値が異なるから。

問八　左の枠内の文章は、本文中に入るべき部分である。それはどこか。もっとも適切な場所を次の**ア**～**エ**から選び、その解答欄にマークせよ。

> ここから、人間の間に、競り合い、さらには闘争が生まれる。なぜなら、他人による評価は自動的には生じないからである。互いに他人を自分よりも劣ったものと感じる傾向があるかぎり、複数の人間の間には競争と闘争が生まれるほかはないからである。

ア　A　　**イ**　B　　**ウ**　C　　**エ**　D

問九　この文章の趣旨に合わないものを次の**ア**～**カ**から二つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア　人間の間の闘争は、社会的欲望が満足されないところからくる。
イ　自分の存在価値を規定するのは、他者の視線である。
ウ　社会的欲望が欠如を知らないのは、人間が見栄をもつからである。
エ　人間は劣等感を払拭するために、無理矢理にでも他人の是認を求める。
オ　戦争は他者から優越しようとする人間の欲望が、集団的な形態をとったものである。
カ　物質的欲望が満たされなければ、社会的欲望は満たされない。

（二）次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある雨の日に、私は混沌(注1)の寝起きするわら床の傍の散らかった机の上を少し片付けようとして、端にのっかっているマッチ箱を何気なく振ってみた。 a と音がする。またどこかの野の果てで摘みとった野草の種かと思ってあけて見ると、黒っぽい不整形の乾いた小さい粒々が、半分位つまっていた。無論草の種でもなし、砕いた薬草の根粒でもなし、鉱石の重みもない。

「これなあに」

土壁に頭をつけて向うむきに寝ていた彼は、穴ぼこみたいな目で振り向いた。

「ひばりのクソだ」

「どこの」

「水石山の草っぱら。いじるなよ」

それきり向うを向いて、問答は終りだった。ひばりといえばずっと前、金色に熟れた広い小麦畑の真中の畝間に、黒っぽい五つの草色の卵が土寄せした茎の窪みの間に、巧みに巣づくりされたこまかい根屑の丸みの中に b と納まっていた。私は子供の頃習った百姓とひばりの話を思い出して、混沌にそっと知らせた。巣の口や卵にさわったかと真顔できくから、ただ覗いただけだと私も真顔で答えた。彼は卵に頭を近づけてよく見、私を畑の外へ押し出してささやくようにいった。

「そっとしとけよ。ちょっと親が巣を離れただけだ。警戒しながらじきけえって来て抱く」

「子供らに見せてえな」

「よせ。ひばりの親がまごつくだけだ」

甲 私はおかしいのを忘れた。自分も一つの秘密な期待にうれしい好奇も手伝って、

「じゃあここは一番あとに刈るしかねえな」

近所の家の畑はそろそろ鎌が入れられている。播きつけ面積の多い私たちは、一番穂波の摘ったここから一足先にはじめるつもりでいたが、陸稲(注2)をまきつけておいた不出来なはしの方から鎌の音を静かにして、 A に気がねしながらごそごそ刈りつづけた。ばかげたはなしだとは思いながら。

三日目、卵はかえった。天にとび上がる親ひばりの声が一きわ高かった。早くかえったことが早く巣立ちさせることになり、それだけ麦の刈取りが進められる。私たちは何となくほっとしながらその声をきき、弾丸のように畑に降りる親ひばりを眩しく見た。

私はその時きりで、又暇も惜しくて、神妙に覗きもせずに素通りしていたが、彼は毎日忍んで見つづけていたらしい。子供たちの姿の見えない時、

「爪先立ちで麦にさわらねえで、そっと見て来い。五匹とも口をあけてっぞ」

いわれた通りに私は黄金の穂のぞっくりしている畝間に身をかがめた。こそとも音はたてないつもりなのに、雛は敏感な習性からか、動く気配をかぎとって一斉に口をあける。毛も生えない赤い肌に、翼の骨子となるのか黒ねずみ色した三四本の羽のようなものがくっつき、小さな頭の上に二三本濡れたような毛をつっ立て、小汚なく c と寄りかたまってその五つの首筋をもたげ、のどの奥まで嘴をひらいて目は閉じられたまま、本能の食欲に促されているグロテスクな姿は義理にも可愛らしいとはいえない。私は手で口を押さえて這い出した。

「鶏の雛なんか羽が乾くとあんなにきれいで可愛いのに――」

笑いを爆発すると、

「鶏とは卵の形がちがあ」

B 。この人はひばりが好きなんだ。だから気味悪いあんなかたちでも可愛いんだよ。私はそうきめると、さっさと鎌を研ぎ d と勢いよく刈り続ける。おくれれば近所の手を借りねばならぬ。出来れば晴間のつづくうちに刈り倒し、たばねて乾かし脱穀機にかけたい。梨畑の梨の袋も半分はまだふさがらないのだ。気は急いている。私はひばりの子は意にかけないで、金色の畑を片はしから刈り伏せていった。二度ばかり弱い梅雨があって、又からり晴れ上がった。混沌は朝食をすますと、後片付けしている私にいった。

「二間四方、な、二間四方巣のまわりを残しておけよ」
私は腹の中でくすりと笑ったが仏頂面したまま、
「まだひばりがいんのけ」
「すっかり羽が生え揃った。今度はめんごいぞ。飛び立つのも近えべ。飛べなくても歩いて餌さ探しは出来る。藪ん中さかくれることも出来っぺ、もう安心だ。飛び立つまでそっとしておけよ」
「ばかみてえに畑のまん中さ二間ばかり刈り残しておくなんて、ひとに何だと思われっぺ」
頬をふくらませながら、でもやっぱり私もその時は［ e ］と朗らかに抜けている。適期のみのりを刈り残しておいて、こっそりその巣を覗き込んだ。あの赤い肌の子ひばりは巣一ぱいにもり上がり、びっしりと頭の毛は生え、黒い目玉はきろきろと丸く、嘴は灰色に固まりしっかりと閉じ、翼は伸びて羽づくろいして胸毛をのぞかせ、唯飛び立つ強靱の筋金をきたえはじめているようで、その成長の素早さを見せてくれた。私は手を伸ばして一羽を抱きとりたい思いがした。空で旋回する親の鋭い叫びがふりおちてくる。まずいと思ってあわててそこを去った。が、翌日はもう巣は空になっていた。私はその麦をきれいに刈り取り見通しのきく広い畑にした。すぐに小豆を播きつけねばならぬ。雨風にさらされた灰色の古巣は、それでもしっかりと形を崩さず手頃の弾力を持つ。子供たちに与えると彼等はそれを丸めてボールにしてきゃっきゃっと投げ合った。
水石山のひばりの糞とは極めて混沌にはぬくぬくと結びつけられる不思議ない微笑を伴なう。(注3) 私は温みかけた高原の澄みきった空を思い描いた。自由に垂直に舞い上がり舞い下がり、待ち焦れた春の歌を高々とうたいあげながら、どん欲に食をあさり、焔のような生殖を営み、安らかに雛を育てた。その深々とした丸い古巣のあたりからでもみつけたらしい厳粛な生の実存のしるしである小さい糞の粒々。それをうすあかりのようなよくも見えない目で丹念に拾い集めて、マッチの空箱に入れてポケットにおさめた。牛の背のようななだらかな水石山の草原の緑に埋もれて、ひとりひっそりと空を眺め、雲の行方を追い、耳に山風の音をききながら、乙余りの静寂の中故に却って日頃の生きる疲労と精魂の孤独が身にしみて、或いは心の一部を妖しく苛立たせていた彼であったかもしれない。然しマッチ箱を手にしたその時の私は唯単純に笑った。まるで［ C ］にしか思えない。

（吉野せい『洟をたらした神』より）

注1　混沌は筆者吉野せいの夫のペンネームであり、このエッセイで筆者は終始夫をそのペンネームで呼んでいる。
注2　陸稲とは畑で育てられる稲のこと。
注3　ひばりの糞と夫が筆者の中では思い出として自然に結びつけられているものであることを述べた、筆者特有の表現。

問十　空欄［ e ］に入るもっとも適切な語句を次の**ア**～**カ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア　ほくほく　　**イ**　ばりばり　　**ウ**　かさかさ　　**エ**　ぽっかり　　**オ**　もぞもぞ　　**カ**　ちんまり

問十一　傍線部甲「私はおかしいのを忘れた」とあるが、なにがおかしいのか。もっとも適切なものを次の**ア**～**オ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア　知らぬ間に夫に同調していた好奇心いっぱいの自分
イ　思わず頭に浮かんだ、ひばりの親がまごつく様子
ウ　あまりに子供じみている自分たちの会話
エ　麦の収穫を忘れてしまうほどの夫の呑気さ
オ　夫がひばりに対してみせた、あまりに大まじめな態度

問十二　空欄 A に入るもっとも適切な語句を次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　近所　　イ　夫　　ウ　親ひばり　　エ　卵　　オ　子供たち

問十三　空欄 B に入るもっとも適切なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　私が興ざめするほどの愛情をこめて言った
イ　私の笑いを軽蔑するようにむっとしている
ウ　私はそれでも雛の姿はグロテスクだと思った
エ　私にもひばりへの愛情を持つように諭している
オ　私の無関心をうんざりしたように突き放した

問十四　傍線部乙「余りの静寂の中故に却って日頃の生きる疲労と精魂の孤独が身にしみて、或いは心の一部を妖しく苛立たせていた彼であったかもしれない」と書く筆者の夫に対する気持ちをもっともよく説明したものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　苦しい生活のなかで、疲労を蓄積させてきた夫の苦労を思い、母親のような優しい慈愛に満ちた心持ちでいる。
イ　夫の心の深淵を垣間見、ある程度理解しつつも、その深奥に立ち入ることができないもどかしさを感じている。
ウ　夫が急に遠い存在になったように感じられ、その距離を埋めたいと思っている。
エ　今まで気づかなかった、夫の謎めいた側面を知り、それを理解できない自分に苛立っている。
オ　夫の孤独、寂寥感を改めて認識し、それに気づかなかった自分に対して罪の意識を感じている。

問十五　空欄 C に入るもっとも適切なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　幼児同然な飄逸（ひょういつ）な阿呆らしさ　　イ　子ひばりのような純粋さ　　ウ　麦の如く天をめざす一途（いちず）さ
エ　雑草のような旺盛な生命　　オ　牧牛同然の鈍重な存在

問十六　この文章の内容に合致するものを次のア～カから二つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア　筆者は、かつて自分が耕す畑の中に偶然見つけたひばりの巣をめぐって交わした夫とのやりとりを思い出し、夫の天衣無縫さを懐かしく感じている。
イ　筆者は、ひばりの糞をマッチ箱に入れ持ち歩くことによって、自由のない孤独な自分を、ひばりに仮託し、解放させようとしている夫に対し、申し訳ない気持ちでいっぱいになっている。
ウ　筆者にとって、ひばりの糞のエピソードは自分と夫の生のありようを再認識する手がかりになっている。
エ　筆者にとって、自分が不用心に巣に近づきすぎたため、ひばりが予想外に早く巣立ってしまったことは苦い想い出である。
オ　筆者は、農夫としては無邪気すぎる夫が、一緒にいて楽しい伴侶であると同時に、自分の孤独を思い出させる存在だということを確認している。
カ　筆者は、ひばりの糞をマッチ箱に入れて大事にとっていた夫の行動を、懐かしく思い出しながらも皮肉をこめて描いている。

(三) 次の文章は『飛鳥井雅有日記』（春のみやまぢ）の一節である。読んで、後の問いに答えよ。

十日。昼つけて東宮に参りたれば、殊に人少ななり。廂にて打ち声づくれば、やがて出でさせおはしまして、「今年はいまだ郭公こそ聞かね。誰か聞きたる」と御尋ねあれば、御供に候ふ女房たちも、いまだ聞かぬ由申さる。「いづくに鳴くとだにいまだうけたまはりおよばず。その所を定め、人数を分かちて、初音の勝負をし侍らばや」と申し出だしたれば、「まことに興あるべきことなり。院の御方に申し合はせて、定めん」とて、やがてあの御方へなりぬ。とばかりありて、宰相の局にて、まことにさるべきことなりとて、左右の人数を分かちて、左方の奉行は綾小路三位、右は催すべき由うけたまはる。人数、左方、院の御方、経資卿、邦仲朝臣、為雄朝臣、兼行朝臣、信有、顕範。右、東宮の御方、雅有、康能朝臣、資行朝臣、長相朝臣、頼成、為方。女房には、左、新大納言宰相、高内侍。右、右衛門督、伯耆。証人のために、女房一人、男一人、両方に取り替へて目代たるべし、明後日、北山殿へ御幸あるべし、左方の所は右近の馬場、右は東山なるべしと、定められぬ。すなはち、右の人々にこの由あひ触る。

十二日。雨降る。昼程に晴れぬ。今日、御幸なり。やがて勝負あるべしとて、人数みな集まる。申の半らばかりに、右方の人々、この家に来たり集まる。女房車一両、証人のために左の高内侍乗り具す。この車には康能朝臣、証人の左、信有あり。一両には長相、頼成。資行朝臣はこなたの証人にて御幸の御供す。まづかねて右方あひ談義するやう、「もし一声も聞かで帰りたらんこと念なかるべし。たとひ後に顕はるとも、一旦論じたらんは、はるかに興ありなん」とて、作り郭公を用意す。みな人々の供の者どもに吹かせて、これを選ぶに、供にある雑色男すぐれて、かねて山に設けさす。さて鷲尾へと遣りつつ来るに、祇園林にてやがて鳴きぬ。人々喜びののしるに、左方の人々すべて言葉なし。「やがてはや聞きたる由の歌詠め。追ひつかせて御幸に申させん」と康能頻りに申せど、「よからぬことはなかなかなるべし」と申せば、げにもとて、事の由ばかりを使ひにて申す。これより帰るべきことにあらねばとて、なほ、鷲尾へ行くに、ここにてもなほ、をち返り鳴く。これをば知らで、かねてより設けたる男や作りごとせんずらん、さらばまことも汚れぬべしとて、者どもを山へ走らするさま、いとをかし。女房、車より降りて堂堂見らる。果ては峰の堂までよぢ登りたれば、日は既に暮れて、都の方は、げにただ一叢の霞ばかりなり。信有の侍従、「山路に日暮れぬ」といふ朗詠を一両反す。まことに折りに合ひておもしろし。雲間の月はなやかに差し出でたる光に帰り参りて、東宮の御方にて事の由を申して出づれば、人々少々追ひ来たる。夜もすがら遊び明かしぬ。

問十七 この文章は何月（旧暦）の日記か。もっとも適切なものを次の**ア**～**オ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア 二月　**イ** 四月　**ウ** 六月　**エ** 八月　**オ** 十月

問十八 傍線部a「させおはしまし」の敬意の対象としてもっとも適切なものを次の**ア**～**カ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア 筆者　**イ** 東宮　**ウ** 院　**エ** 女房たち　**オ** 宰相の局　**カ** 綾小路三位

問十九 傍線部c「せんずらん」を単語ごとに分けるとすると、どのように分けられるか。もっとも適切なものを次の**ア**～**カ**から選び、その解答欄にマークせよ。（「／」は区切りを示す）

ア せんず／らん　**イ** せん／ずらん　**ウ** せ／んずらん
エ せ／んず／らん　**オ** せ／ん／ずらん　**カ** せ／ん／ず／ら／ん

問二十 傍線部1「うけたまはりおよばず」、傍線部2「うけたまはる」の主語は同じである。それは誰か。もっとも適切なものを次の**ア**～**カ**から選び、その解答欄にマークせよ。

ア 筆者　**イ** 東宮　**ウ** 院　**エ** 女房たち　**オ** 宰相の局　**カ** 綾小路三位

問二十一　傍線部3「念なかるべし」の解釈として、もっとも適切なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　我慢が足りないといわれるだろう。
イ　意外なことと思われるだろう。
ウ　記憶にも残らないだろう。
エ　考えてはなるまい。
オ　残念だろう。

問二十二　傍線部4「よからぬことはなかなかなるべし」の解釈として、もっとも適切なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　作り郭公の声でだますなどよくないが、かえってそれを面白がって下さるだろう。
イ　作り郭公の計画をしてだますなどしたら、かえって悪い結果を招くことだろう。
ウ　作り郭公の計画をして歌まで詠むことは、かえってやらない方がましだろう。
エ　うまくもない歌を詠んだら、かえってお叱りを受けるだろう。
オ　うまくもない歌の方が、かえって面白がってもらえるだろう。

問二十三　この文章の内容と合致するものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア　右方の作り郭公の計画は成功したが、初音を聞いたと院に報告することはやめた。
イ　右方は作り郭公の計画を実行したが、右方はこの日に本物の郭公の初音も聞いた。
ウ　右方の作り郭公の計画は東宮の発案であり、その成功はその夜東宮に報告された。
エ　右方は作り郭公の計画を実行して、院の裁断によってその日の勝ちと認められた。
オ　右方の作り郭公の計画は、同行していた左方の証人に実は途中で気づかれていた。

〔以下余白〕